

錢形平次捕物控

振袖源太

野村胡堂

青空文庫

一

兩國に小屋を掛けて、江戸開府以來最初の輕業かるわざといふものを
見せた振袖源太。前髪立の素晴らしい美貌びぼうと、水際立つた鮮やか
な藝當に、すっかり江戸ツ子の人氣を掴んでしまひました。

あまりの評判に釣ひたられるともなく、半日の春を小屋の中の空氣
に浸ひたつた、捕物の名人で『錢形』と異名を取つた御用聞きの平次。
夕景から界限の小料理屋で一杯引つかけて、兩國橋の上にかゝつ
たのはもう宵の口。

小唄か何かくちずさ口吟ながみ乍いざよひら、十六夜の月明りにすかして、何の氣

もなくヒヨイと見ると、十間ばかり先に、欄干^{らんかん}へ片足を掛けて、川へ飛込まうとして居る人間があります。

「あッ」

と言つたが、駆け付けるには少し遠く、大きな聲を出せば、直ぐ飛び込まれるに決つて居ります。

思はず袖へ手が入ると、今しがた剩錢^{つりせん}にとつた永樂錢^{えいらくせん}が一枚、右手の食指と拇指^{ぼし}の間に立てゝ、ろくに狙ひも定めずピユウと投げると、手練は恐ろしいもので、身を投げようとする男の横^よこびん鬢^{こびん}をハツと打ちます。

「あッ、何をするんだ」

思はず飛込みさうにした欄干^{らんかん}の足を引込めて、側へ飛んで來

た平次に、噛みつきさうな顔を見せます。

「お、危ねえ。俺は河童かつばの眞似は得手えてぢやねえから、飛込まれたら最後見殺しにしなきアならねえ」

さう言ひ乍ら、冗談らしく相手の袖を押へた平次。咄嗟とつさの間に見極めると、年の頃五十六七、實體らしい老爺おやぢさんで、どう間違つても身投などをする柄がらとは見られません。

「無法な事をするにも程があつたものだ。こんなに脹はれちやつたぢやないか、見ろ」

老爺は身投することも忘れて、しきりにこめかみに唾つばを附け乍ら、小言を言つて居ります。

「勘辨しねえな、とつつあん。さうでもしなきやア、間に合はな

かつたんだ。命と釣替へなら、こめかみへ穴が明いたつて我慢が出来ねえこともあるめえ」

「不法な人があつたものだね、どうも」

老爺さん甚だ平かぢやありませんが、永樂錢一枚の痛手で、兎に角死ぬ氣がなくなつてしまつたことだけは事實のやうです。

間もなく平次は、もう一度東兩國の小料理屋に取つて返して、身投を思ひ止らせた老爺の話を聞いて居りました。

「人間、洒落^{しやれ}や冗談に死ぬるものぢやねえ、ざつくばらんに話して見なさるがいゝ。金も智恵もあるわけぢやねえが、何を隠さう、俺は平次と言つてお上の御用を勤める人間だ。次第に依つちや相談相手にならねえものでもあるめえ」

「え？ 錢形の親分さんで御座いましたか。これはいゝ方に助けて頂きました。斯^かうなればもう、嫌だと仰しやつても申し上げずには居られません。どうか、終末^{しまひ}まで皆んなお聞きなすつて下さいまし」

世にも奇怪な話が、老爺の朴訥^{ぼくとつ}な調子で斯^ゑう描^{えが}き出されて行きます。

二

日本橋通り四丁目に八間間口^まの呉服屋^{ごふく}を開いて、一時越後屋の向うを張つた『福屋善兵衛』、丁稚小僧^{でつち}八十人餘りも使はうとい

ふ何不足ない大世帯の主人ですが、先月の末から、五人の子供のうち三人まで順々に行方不明になつたには驚きました。

最初は先月の二十五日、二十四になる總領が、日本橋の店から白晝煙のやうに消えて無くなり、月を越して本月の五日、二番目の二十一になる息子が、これも日本橋の家で、一と晩のうちに行方^{くへ}が判らなくなつてしまつたのです。

そればかりなら偶然^{ぐうぜん}の廻り合せとも思つたでせうが、續いて昨日の十五日、三番目の十八になる娘が、親類の家へ泊りに行つて居て、其先から誘^{かどは}拐^かされてしまつたのです。

斯う十日目十日目に、上から順々に子供が見えなくなつて行くところを見ると、もう偶然の出来事と濟して居るわけには行きま

せん。主人の善兵衛はことのほか心を痛めて、『金づくで濟むことなら』とあらゆる探索たんさくをしましたが、不思議なことに三人の行方が一向判らないばかりでなく、その行方不明になつた足取りも、まるで見當が付かないのです。

これだけの事は、錢形の平次も聞き知つて居りましたが、改めて關係者の口から聞くと、なるほど事件の裏には濃厚のうこうな犯罪の匂ひがありさうです。

「私はその三番目のお嬢様のお伴ともをして、御親類のところへ参りましたが、行方不明になつたと言つて、今更『福屋』へ歸る面めん目めも御座いません。まる一晝夜、心當りを探し抜いた擧句あげく、思案に餘つて兩國から、フラフラと入水じゆすゐしようとしたので御座い

ます」

忠實さうな老爺が、話を^{をは}了つて到頭ボロボロと泣き出してしました。

「成程、話を聞けば尤も^{もつと}だが、お前さんが死んだところで、娘御が歸つて来るわけのものぢやあるめえ」

「へエ——」

「よしッ、俺が一番乗出してやらう。それだけの業^{わざ}をするのは、何うせ並大抵の人間ぢやあるまいから、骨が折れても張合があると言ふものだらう。お前さんは知らん顔をして歸つて、内の様子を俺のところまで知らせちやくれまいか」

「親分が乗り出して下さりや千人力で、有難う御座います」

錢形の平次は人を助けたばかりに、到頭この事件の眞つ只中に飛込んで行くことになつてしまひました。

三

平次は早速福屋へ乗込んで見ましたが、日も經つて居ることであり、行方不明になつた三人の兄妹が、何うして誘き出されたか、まるで見當が付きません。その頃は警察制限も至つて不完全で、町人もそれに信賴する氣は微塵みぢんもありませんから、これ程の事件を、何處へ届け出るでもなく、八十何人の奉公人や、一家身内の者が寄つてたかつて、唯もうワイワイと騒ぐばかりです。

わけても主人の善兵衛は、半病人のやうな有様、評判のいゝ岡つ引の平次が顔を見せると、

「親分、何とかして三人の者を探し出して下さい。場合に依つては、福屋の身しんしやう上を半分潰しても構ひません」

拜まないばかりに頼み込みます。

残つた家族といふのは、十六になる娘のお糸と、六つになる男の子の榮三郎と、一年ばかり前に娶つた後妻めとのお瀧のちぞひだけ、世間並に考へると、この繼母のお瀧が一番疑はれる地位にあるわけです。

本人もそれを悉く承知で、岡つ引の平次と顔を合せると氣の毒なくらゐオドオドしますが、平次の眼から見れば、大それた悪事

を働くほどの女とも思はれません。

年の頃三十三、善兵衛に比べると少し若いが、大家たいけの女房にふさはしい美しさも品もあり、奉公人の評判も先づ悪くない方です。

外に奉公人は八十幾人、これは片つ端から調べるわけにも行かず、その中には、身許の怪しい者は一人もないといふ大番頭の證言を信ずるより外にはありません。

平次は、其儘引揚げて兎に角與力笹野ささの新三郎の耳へ、一件の始末さつやを囁いて置きました。

「なるほど、それは可笑をかしい。突つ込んで調べ上げたら、飛んだ大物が掛つて來るかも知れない。もう少し見張つて居るがいゝ」

笹野新三郎も斯^かう言つて油をかけてくれます。

一日、二日と経つうちに『福屋』の一家は新しい不安に閉^{とぎ}されるやうになりました。今までの例によれば、この二十五日には四番目の娘お糸が行方不明になる番です。

お糸といふのは此間行方不明になつた姉のお清と共に、日本橋の二人小町と言はれた美人ですが、自分の身に降りかゝる恐ろしい危難を豫知したのか、近頃は一日増しに憂鬱^{いゆううつ}になつて行きます。それよりも心配したのは父の善兵衛。

「お糸、何處に居る。お糸」

と少しでも姿を見せないと、家中探し廻るといふあわてやう、全く氣の毒で正面^{まとも}には見て居られません。

「此處は人の出入りが激しくて、とても見張つては居られませんから、二十四日の晩からお糸は向島の寮へやつて置くつもりです。ついては親分、忙しいところを、何とも申し兼ねますが、二十五日一日だけ、娘の側へ附いてやつては下さいませんか。さうして下されば、外の者が百人附いて居るより心強いわけで御座います
が——」

福屋善兵衛が折入つての頼みです。

「相手は何分容易の者ぢやない。私が見張つて居たところで、防ぎやうはないかも知れませんよ。それを承知なら一日お邪魔をさせて頂きませう」

錢形の平次ともあらうものが、甚だ自信のないことを言ひます。

四

その日、娘のお糸を護つて向島の寮の警戒は、物々しいと言は
うか、大袈裟おほげさと言はうか全く話になりません。日本橋の店から來
た屈強な手代が十五六人、それに平次の手下が五六人、寮の番人
やら女中やら、本店から來たお糸附の奉公人やら、近所の衆の手
傳ひを加へると、總勢三十人あまり。美しいお糸を十重二十重とへはたへに
包んで、晝のうちから水も漏もらさぬ警戒振りです。

晝のうちは、それでも何事も起りませんが、あまり騒さわぎが大袈
裟だつたので、夜になると、皆んなの顔には明かに疲勞つかれの色が漂たゞよ

ひます。

平次はそれを督とくれい勵して、厭應言はさず部署につけました。寮の入口といふ入口には、人を二人づつ配置して、危ないと思つた場所には、雨戸一枚に一人といった工合に、蟻の這ひ出る隙間もなく人を配つてしまひました。

お糸は早くから氣に入りの女中お千代と自分の部屋に籠うたつてしまひましたが、いかに警戒が大事でも、日本橋小町と謳うたはれた十六娘の寢室に押し込んで、その美しい寢顔の番人まですることは平次に出来ることではありません。幸さいひ行き止りの二方口の部屋ですから、廊下には信用の出来る子分を二人張り込ませ、自分は日本橋からやつて來た大番頭の嘉七、寮の番人夫婦などと一緒に、

次の部屋に陣取つて、夜と共に語り明かす決心を定めました。

「お嬢様、お休みなさいませ。お召換めしかへは——まア、其儘で——」
 そんな事を言ふ女中の聲が手に取るやう、やがて不安のうちに眠りに就いたものか、隣室の物音がピタリと絶えます。

平次は寮の番人夫婦に目くばせをすると、お神さんは立つて、襖を細目に開けました。中には薄暗い街燈あんどんの蔭に、派手な夜の物を深々とかぶつた娘の頭つむりが、平次の方からも手に取るやうです。

「——」

うなづいて見せるとお神さんは、そのまゝ唐紙を閉めて元の座に歸りました。

向う河岸を山谷堀に通ふ猪牙ちよきの音の繼續したのも暫し、やがて

向島の土手は太古たいこのやうな静せいじやく寂じやくに更けて行きます。

それから三刻ばかり、家の内外の者は一人として眠つたものはありません。刻々高まつて行く異常な昂かうふん奮ふんを抑へて、窓から曉の光の忍び込むのを見た時は、全く腹の底から救はれたやうな心持になりました。

「やれ有難い」

番人夫婦は、明らさまにさう言つて、掌てのひらで額を叩いたりなどしました。

雨戸を開けると、一パイに春の陽が、歡喜と希望とを惜し氣もなく家中に漲みなぎらせます。

が、其時不意に、

「あッ、お嬢様がッ」

隣室から女中の聲。

唐紙を押し倒すやうに飛込んで行くと、お糸の床は藻^も抜^ぬけの殻^{から}で、その側に女中のお千代が、あまりの事に尻餅を突いたなり、ろくに口もきけません。

平次は飛付くやうに、床の中へ手を入れました。中はまだ人肌の温みが残つて、誘^{かどはか}拐^かされたにしても、そんなに遠くへ行つたとも覚えません。

「家から誰も出さな。持場々々^{かた}を固めて、手に餘る奴が飛出したら呼子を吹けッ」

平次は縁端に立つて、凛^{りん}々^くと朝の空氣の中に響かせます。

それからまる半日、寮の中は煮えくり返るやうな騒ぎでした。

疊をあげ、戸障子を外し、天井裏まで入り込んで、鼠一匹見落さないやうに探しましたが、曲者の姿は愚か、暗がりおろに隠したらピカピカ光るだらうと思ふやうな、美しいお糸の姿も見えません。

主人善兵衛の歎き、繼母まははお瀧おどろの駭おどろきは申すまでもなく、第一、これ程嚴重にしても、四番目の娘をさらはれた——では少しばかり大きい口を利いてやつて來た、錢形平次の顔が立ちません。

自尊心の高い男だけに、善兵衛夫婦に合せる顔もなく、トボトボと土手どてを本所の方へ歸つて來ると、後ろからソツと平次の肩に手を置いた者があります。

「兄あにき哥、大層沈んでるぢやないか」

「えッ」

振り返ると、石原の利助といふ四十男、同じ御用仲間ですが、評判の腕つききで、平次とは自然、張合となつてゐる人間です。

「福屋の一件へ兄哥が手を付けたつて話だが、ありやア止した方がいゝぜ」

「それは又何ういふわけだ」

「あの誘拐かどはかしなら、俺の方ぢやもう檢舉あげるばかりになつて居るんだ。満更知らねえ顔でもない兄哥に恥を搔かかせるでもないと思つてね」

「えッ」

嫌な事を言ひ残して、利助は向島の方へ——、後も見ずに立去ります。

五

五人兄妹の四人まで、五の日く／＼にさらつたと言ふので、『福屋』の事件は江戸中の騒ぎになりました。その日のうちにかはらば瓦版んが出て辻々を呼び歩く騒ぎ、錢形の平次が寝ずの番で見張つてゐて、まんまと出し抜かれたと言ふのですから、それは全く江戸ツ子を夢中にさせるだけの値打があります。

與力筆頭笹野新三郎も、斯うなつては捨て置くわけに行きません。日頃可愛がつてゐる錢形の平次ですが、役向の手前呼び付けてツイ苦い顔も見せなければなりません。

「何うした事だ、平次。お前にも似合はないへまぢやないか」

「へエ——、誠に、面目次第も御座いけません。世間並に高が繼母の細工か何かだらうと思つたのが大縮尻しくじりのもとで——」

「と言ふと、誘拐かどはかしは繼母のお瀧ではないといふやうに聞えるが、確かにさういつた見込みでもあるのか」

笹野新三郎は少し意外な面持です。

「確しかとは申し上げられませんが、あれほど鮮あざやかな藝當は、女一人の手で出来るわけは御座いません。それにあの繼母のお瀧つて女は、どうしてもそんな悪婆とは思はれないので御座います」

「と言ふと、平次は何時の間にやら人相の方もやるのか」

「へエ——」

此頃の與力には恐ろしく洒落^{しやれ}た人があつたもので、平次も二の句が繼げなくなります。

「實はな平次、今日石原の利助が、あの繼母のお瀧を擧げて來たんだ」

「あツ、到頭やりやがつた」

「お前にも心當りがあるのか」

「いゝえ、繼母のお瀧が悪事をするか何うか、そんな心當りぢや御座いません。利助兄哥が此間嫌な事を言つて居りましたから、私の鼻を明かすつもりでそれ位の事はやり兼ねません」

「さうか」

と言つたが、笹野新三郎は何方^{どっち}の肩も持つやうな事も言ひませ

ん。

「かうなれば、私も死物狂ひでやつて見ます。どうか、もう二三日お待ちなすつて下さいまし」

「何時までも待つてやるが、其代り、もう次の五の日が来るぞ。

五人兄妹種無しにさらはせて了つた後では、仕事がやり憎くはないかな」

「へエ——」

平次は悄然^{せうぜん}として笹野新三郎の前を滑りました。

怨多^{うらみ}い晩春^{ゆふべ}の夕、八丁堀から大川端へ出ると、何だかかう泣きたくなるやうな風物です。

せめてこれが、『子供を返すから金をくれ』とか何とか言つて

來ると、當りも付くわけですが、血を流さず金も欲しがらずでは、一體何を目當に、こんな残酷さんこくなことをするのか、平次にはまるつきり見當も付きません。

六

「お、とつつあん、久し振りだね、あれから何處に居なすつたんだ」

「親分さん、お早う御座います。日本橋のお店で雑用を致して居りますが、今日は向島の寮が忙いそしいから、彼方へ行つて見てくれといふお話で——」

「もう死ぬ氣はないだらうね」

「へ、へツ、どうも、その節はまことに有難う御座いました」

さういへば、いつぞや平次が錢を飛ばして、身投を救つてやつた老爺おやぢです。

「ところで、とつつあんは晩まで此方に居るだらうね」

「へエ、居りますつもりで」

「それでは、とつつあんを見込んで頼みがある、引受けてくれるだらうか」

「それはもう、親分の仰しやる事なら命にかけてもお引受けいたします」

「そんな大した事ぢやないんだが、此寮の中には、お前さんほど

氣心の判つた人はないし、第一死ぬ氣にまでなつた人なんだから、お前さんの正直は確かだ、——どうかすると、此役目が一番大事かも知れないよ。ちよいと、耳を貸してくんな」

平次は老爺の耳に口を寄せて、何やら囁いて居ります。

「へエへエ成程、へエ」

「判つたか、人に覺られちや、何にもならないよ」

「へエへエ」

爺は唯々として向うへ行つてしまひました。まだ朝のうちで、そんな手廻しには、誰も氣が付きません。

福屋善兵衛の最後の寶、五番目の榮三郎が狙はれるであらうと思はれて居る五日の朝から、平次は向島の寮に入り込んで、八門も

遁甲んとんかふの陣を敷くほど念入りに準備を整へました。

曲者は玄關から雨戸からも入るのではないといふことは、判り過ぎるほど判つて居りますから、今夜は外の警戒を一切撤てつくわ回いして、三十幾人の頭をすつかり家の中に集中してしまひました。

寮のことで、大して大きい部屋はありませんが、それでも奥八畳と六畳二た間打つこ抜いて、その中程のところに、狙ねらはれて居る筈の榮三郎を置き、その外へ平次の子分、福屋の手代、番頭、近所の衆など總勢三十餘人、二重の人垣を作つて嚴重に取圍みました。

暖かい時分ですが、曉あけがた方の冷えを勘定に入れて大火鉢へ埋火

二杯、煙草盆と茶と、菓子と、足の踏みどころもなく配つた上、百日蠟燭らふそくを點けた大燭臺おほしよくだいが四基き、二つは榮三郎の左右へ、女中のお千代が護つて控ひかへ、二つは部屋の入口へ、見知り越しの近所の娘が番をして居ります。

平次と主人の善丘衛が、丁度中程のところに相對して、夕景から座を起たず、ポツリポツリ話して居ります。繼母のお瀧が召捕られてから、善兵衛の氣の挫くじけやうは見る眼も氣の毒で、急に十ばかり年を取つたかと思ふ様子、ハタからは全く慰めやうなぐさもありません。

お通夜つやならお通夜で、故人を偲しのぶ話位はあるでせうが、生きた人間を、神變不可思議な曲者の襲撃しふげきから護らうといふのですか

ら、その不氣味さと言ふものはありません。四回が四回とも、全く違つた手でさらつてをりますから、今晚は何んな術てでやつて來るか、——さう考へただけでもぞつと寒氣立ちます。

「親分、大丈夫で御座いませうか」

善兵衛は先刻から、何遍もくこの同じ問とひを繰り返しますが、「何とも言へません。兎に角出来るだけの事をやつて見ませう」平次の答へも、判おこで捺したやうに同じです。

七

子こ、のつ刻少し廻つた頃。

不安と緊張は益々加はるばかり、一座の人達も漸くその壓迫から逃れようとして居りました。何か素晴らしい事件が爆發するか、でなければ、大きな聲で精一杯怒鳴りでもしなければ、三十幾人が皆な氣が狂^ふれてしまひさうな心持だつたのです。

その中に、美しい女中のお千代が、そつと立ち上がりました。何をするかと思ふと、蠟燭に溜^{しん}つた芯^きを剪る爲で、眞^{しん}鍮^{ちゆう}の鋏^{はさみ}を取つて、燭臺の上へ持つて行きましたが、何うした機^{はず}みか、袂^{たもと}が觸^{さは}つて一基の燭臺を横倒しにしてしまひました。

ハツと思つて手を退ると、背後^{うしろ}にあつたもう一基の燭臺^{しよくだい}も引繰り返つてしまひます。

「アツ」

と思ふ間もありません。それと同時に、近所の娘が護つて居た、あとの二臺の燭臺も、誰が觸るともなくバタリと倒れて、部屋の中は眞つ暗。

「キヤツ」

「助けてツ」

悲鳴と共に、どたり、ばたりと立ち騒ぐ物音。その中を唯一人、冷靜な聲で、

「^{あかり}灯だ、灯だ、勝手から持つて來てくれ」

と言ふのは錢形の平次です。

併し^{しか}これだけ顛倒^{てんだう}すると、急にお勝手へ飛んで行つて、行燈

や手燭を持つて來るほどの氣の廻る人間もなく、お勝手に居る飯^め

炊き^{した}と近所の女房達は、奥の騒ぎにすっかり怯^{おび}えてしまつて、急
の事では腰も伸^{のば}せません。

「早く、灯^{あかり}、灯、坊つちやんは俺^{おき}が抑^{おさ}へて居る」

二度目の平次の聲に、勢ひを待て飛出した二三人の子分。臺所
へ飛んで行つて、行燈と手燭と有りつたけの灯を持つて來ると、

これは何とした事でせう、部屋の中は、實に亂離^{らんりこつぱひ}骨灰、のた

打ち廻る人間と、散らばされた道具類で、足の踏場ありません。

それよりも驚いたのは、榮三郎の裾^{すそ}を確^{しつか}り掴んで居ると思つた

錢形の平次でした。掴むには確^{たし}かに掴んで居りますが、それは榮

三郎の裾ではなくて、最初の燭臺を倒した、美しい女中のお千代

の裾、しかも紅く艶なまめかしくさへある裾を確り掴んで、泳ぐ形に腹は這らばひになつて居るのでした。

「あッ」

「坊つちやんが見えない」

「榮坊が居ないッ」

成程、榮三郎を坐らせて居た座蒲團だけが、部屋の眞ん中に冷たく残つて、その上に居る子供の姿は搔消かきけしでもしたやうに見えなくなつて居るのです。

三十幾人の無力な護衛達は、暫らく口を利くものもありません。幾度もく其邊中を見廻し、また主人の善兵衛は、いよく最後の愛兒もさらはれてしまった事を確かめると、其儘、

「ウム」

と氣を喪^{うし}なつて了ひました。

女中のお千代は、平次の手から取られた裾を自棄^{やけ}に引離すと、

「到頭——」

さう言つて顔を反^{そむ}けました。勝ち誇つて居るのか、腹を立てて居るのか、まるつきり見當が付きません。

それにこの美しい女中が充分怪しいと思つたところで、平次が咄^{とつさ}嗟の間に裾を掴んで引据ゑて居たのですから、これが榮三郎を隠したのでないことは、判り過ぎるほど判つて居ります。

家の中は又大掃除^{おほさうぢ}ほど探し抜かれましたが、平次はもうそんな事を當てにしません。フラリと飛出すと、ツイ寮の入口から、

向島の土手^{どて}の上に駆け上がつてしまひました。

八

「老爺^{とっ}つあん」

「あツ、親分」

「どうだ、見たか」

「仰しやつた通り、引窓から黒い者が飛出しましたよ」

「何方へ行つた？」

「何か引つ擔^{かつ}いで居る様子でしたが、この通りの闇ではつきりした事は判りません。屋根からいきなり櫻の枝に飛付くと、土手へ

這ひ上つて上手の方へ行きましたよ」

「何、上手？」

「追い驅けて見ましたが、早いなの、年寄の足ぢや追ひ付くことぢや御座いません。そのうちに、土手を滑り落ちたと思ふと、下に輕舸はしけが用意してあつて、飛乗ると今度は下手の方へ漕こいで行きましたよ」

「あ、矢張り」

言ふまでもなく、いつぞや身投げを助けられた老爺と錢形の平次、寮の騒ぎを他所よそに、土手の蔭にヒソヒソと話します。

爺を土手に置いて、屋根の上を見張らせたのは實に慧眼けいがんですが、折角姿を見た曲者を逃がしてしまつては何にもなりません。

併し平次は何か思惑があるのか、別にそれを悔む風もなく、暫らく腕を拱こまぬいて考へて居りました。

「ね、親分さん」

「シツ」

話しかけようとする爺おやぢの口を塞ふさぐやうに、平次は櫻の老樹の蔭に身を潜ひそめます。

寮の勝手元から、ソロリと滑り出した人影、二人の潜んだ櫻の側へ差かゝると、

「待て」

「あッ」

平次の手はその襟首へむんと掛りました。

「そんな事だらうと思つた、來い」

引つ立てて、灯の届くところへ來ると、それは紛れもない女中まぎのお千代です。

其儘女の首根つこを掴んで家へ入ると、主人の善兵衛は漸く正氣付きましたが、あまりの衝動に、まだ口をきく氣力もありません。

「これは一體何うした事で御座いませう」

おろ／＼する大番頭へ、

「大方の見當は付きました。曲者は逃げてしまつたが、片割れは捕まりましたよ。此女を見てやつて下さい」

突き出された女中のお千代は、打ち萎しをれた風もなく、その美し

い頬に冷たい笑ひをさへ浮べて居ります。

「曲者は何うして逃げたのでせう、親分」

取巻く人達を顧み^{かへりなが}乍ら、平次は床の間に登つて、狎^{ちんく}潜りの框^{わく}

へ足を掛けると、長押^{ながし}に片手を掛けて、床の間の天井の板を押し

て見ました。思つた通り、天井坂は二枚ほど樂に開いて、其上に

は、眞つ暗な天井裏が口を開きます、下を見ると床の間の花瓶^{くわびん}

の上には、天井から落ちたらしい埃^{ほこり}さへ見えるのでした。

「矢張りこれだ。燭臺を倒して置いて、坊つちやんをさらつて、

此處から飛出したに相違ありません。武術の心得があつて、身體

が軽い者なら出来ない事はない——」

成程さう言はれ、ばそれに相違ありませんが、曲者は上から降

りて來たのではなく、お千代と一緒に燭臺を倒して、此處から子供をさらつて逃出したとすれば、宵の内から一座の中に立ち交つて居たわけですが、誰の眼にも氣が付かなかつたのは不思議です。「すると、此前のお嬢さんをさらつたのは、矢張り今度と同じ手段でせうか」

誰やら、そんな事を聞きます。

「いや、あれは違ひませう。この女に訊きけばわかるが、多分、お嬢さんを宵の内におびき出して置いて、この女中がお嬢さんの部屋で一人二役をやつたに違ひありません。さうでもなければテニヲハが合はない事がある——今晚と違つて靜かにして居たから、天井裏を歩くのが解らない筈もなし、それに曉あけがた方たしまで確かに床

の中に人が居たやうだから、——な、女中さん、それに相違あるまい」

平次に問はれたお千代は、妙に意味の深い微笑を浮べてうなづくばかりでした。

「ところで親分、その娘を痛め付けて、相棒が何處に居るか五人の御さん方が生きて居るか死んで居るか、生きて居るとしたら、何處に隠してあるか、何も彼も白状させてしまひませう」

と子分の者。

正氣づいたばかりの主人も、大番頭も、それを聞いて急に活氣付きました。

「どうだお千代——皆んなは、あんなに言ふが、お前はと思ふ」

平次は子分に掴つかへさして居る女中の顔を覗いて、こんな事を言つて居ります。

お千代は何とも言ひません。觀念し切つた様子で、眉も動かさず、その細つそりした肩を聳そびやかすばかりでした。

「この女は容易よういな事では口を開かないだらうよ。それに俺には、この女の相棒の當りが付いて居る」

「えッ」

「相棒といふのは、今まで燭臺の側に居たもう一人の娘だ。あれは近所の衆のやうな顔をして居るが、實は男だつたんだよ」

驚いたのは、主人よりも番頭衆よりも、子分衆よりも、今まで冷靜そのもののやうに取濟して居たお千代でした。

九

明る日の朝、丁度兩國の見世物小屋の木戸が開かうといふ時、
振袖源太ふりそでげんたの輕業小屋は、錢形平次の子分で八方から取圍まれて
しまひました。別に誘拐かどはかしの確證があるわけではないので、與
力同心の出役はありません。十手を預る錢形平次が、見込みで召
捕つて、證據を突き付けて口を開かせるつもり、一つは繼母けいぼを擧
げた石原の利助への面當つらあてもあつたでせうが、兎に角、この時代
には、こんな形式の捕物も決して珍らしくはなかつたのです。

其代り引つれて來たのは、人數は少いが、一騎當千の腕つきき

ばかり。

「源太御用だツ」

「神妙にしろ」

木戸が開くと同時に、観客と一緒に雪崩れ込んだ捕方、サツと樂屋に飛込んで源太を取囲みます。

此方は振袖源太、もう派手な舞臺着の振袖を着て、萌黄緞子の袴はかまを着けて居りましたが、御用の聲を聞くと、側に置いた小道具の一刀を取るより早く、舞臺の上に掛け連ねた、鞆ぶらんこ、綱、撞し木ゆもくなどの間を猿ましろのやうにサツと昇りました。土間へ半分ばかり入った観客は、俄にはかの捕物に顛倒して、

「ワーツ」

と云ふ騒ぎ、木戸へ飛出すもの、土間へ引くり返るもの、揉み、叫び、泣き、一瞬にして芋を洗ふやうな混亂が始まります。

「振袖源太、神妙にしろ。福屋の兄妹を五人まで誘拐かどはかした事がお上に相判つたぞツ。逃げようとして逃げられる場合ではない。

なまじ罪を重ねるより、お縄を頂戴して、兄妹の在所ありかを申上げろ」

錢形の平次、土間に突つ立つて見上げ乍ら凜々りんくと響かせます。

「お、錢形の平次か、岡つ引でもお前なら少しは話が解るだらう。暫らく其處で聞けツ」

「何？」

振袖源太は、赤地總模様の太振袖の腕まくを捲り上げて、拳こぶし下しがりに一刀を構へたまゝ。三丈餘りの高梁たかはりの上から、土間の平次

を見下ろしました。

藝人の愛嬌あいけうで前髪は立てて居りますが、もう二十三にもなるでせうか、恐ろしい美貌びぼうで、引締つた細顎ほそあご、長い眼、ふくやかな顎きやしや、華奢きやしやにさへ見える恰好など、何う見ても十七八以上とは思はれません。

「俺は、あの福屋一家には七なな度たび生れ變つても酬むくい切れないほどの怨うらみがある」

「――」

その氣組の激しさに、客も捕方かたむも、一座の藝人も、暫く森しんとして耳みみを傾かたむけます。

「詳しく言つたら際限もねえ。俺は福屋の爲ために没落ぼつらくした、本家

福屋の倅だと言つたら、お前にも判るだらう。公儀御用の呉服屋、
にしちん西陣の織物を一手に捌さばいた本家福屋の番頭から仕上げた善兵衛
 が、暖簾のれんを分けて貰ふと、公儀に讒訴ざんそをして、天草あまくさの旗指物を
 引受けたとか、身分不相應の奢侈しやし僭せん上じやうに耽ふけつたとか、根も葉
 もない事を言ひ立て、その爲に父は遠島、母は病死、家は沒收ぼつしう、
 本家福屋は見る影もない有様にされたのを怨まれずに居られよう
 か」

「――」

「俺は漸やうやく命だけを拾つて、長崎へ落延び、異人に輕業かるわざを教は
 つて江戸へ乗り込んで來ると、善兵衛はあの通り日の出の勢ひだ。
 子供一人づつ誘拐かどはかして、あの犬畜生に死ぬよりも辛い苦しみを

嘗^なめさせようと思つたのが何うして悪い。なア平次、お前が俺だつたら、指をくはへて敵の榮華を眺めて居る氣か」

美しい顔は昂^{かう}奮^{ふん}に輝いて、その眼は火のやうに燃えます。

十

「いや、善兵衛には罪はあるだらうが、子供等は何にも知らない。その様な無法な事を云ふものではない。黙つてお繩を頂戴して、五人の兄妹の在所^{ありか}を言へツ」

平次もなか／＼引いては居ません。

「お、言つてやらう。が、言つたら最後五人とも助からぬぞツ」

「何だと」

「見ろ、此太繩を切つて落せば、五人は道具部屋の中で巨石に打たれて鹽^{しほ}辛^{から}になつて死ぬばかりだ」

「えッ」

「ハツ、ハツ、ハツ、驚いたか平次。萬一の事を考へて、俺はこれだけの用意をしたのだ——今まで彼方此方に散らして置いた五人の兄妹は、昨夜纏^{まと}めて此處へ連れ込んで、以前熊を入れた檻^{をり}の中へ投げ込んである。檻の天井には百貫目以上の石を釣つてあるから、此處を切れれば待て暫しはねえ、——どつこい動くな、下手に動くと、今眼の前で此處を切るぞ」

振り冠つたのは小道具物乍ら眞刃^{ほんば}の一刀、梁^{はり}から斜^{なぐめ}に走る太綱

を睨んで、今にも振り下ろさうとします。赤い振袖を着た稀代きだいの美男が、復讐ふくしうの快感に浸つて、キラキラと眼を輝やかす様は、言ひやうもなく物凄まじい観物です。

「待てく源太。その綱を切つて、五人兄妹を殺せば、お前の女房のお千代は、主殺しの罪で磔はりつけ刑だぞ」

「ウーム」

平次は漸く源太の急所を見付け出しました。

「女を引つ立てて来い」

平次が木戸口へ聲を掛けると、

「應ッ」

引立てられて來たのは、雁字がんじがらめに縛り上げられたお千代、

思はず仰いで夫の源太を見ると、

「あ、お前さん」

固く引締つた顔が柔^{やは}らいで、美しい血潮が頬を染めます。

「お千代」

「私に構^{かま}はず、其綱を斷^たつてお了^{しま}ひよ。私ア磔柱の上から、福屋の屋根にペンペン草の生えるのを見てやりたい」

なんといふ氣の強い女でせう。その美しさも滅^{めつぽふ}法ですが、言ふ事を聞くと大の男を顫へ上がらせます。

「待てく、もう一つ言つて聞かせる事がある。宿屋善兵衛は五番目の倅を誘拐^{かどは}かされて、歎きの餘り、今朝死んで了つたぞ」

平次は最後の切札を出しました。

「えッ」

「それでお前達の怨みも消えるだらう。五人の子供達に罪はない、平次が悪いやうには計^{はか}らはない、許してやれ」

「――」

「敵は討ち過ぎるものぢやない。サア、お前の女房の命と五人の命と釣換^{つりか}へだ。此繩を解いてやるから、お前も降りて來い」

平次は本當にお千代の雁字^{がんじ}がらめを解き始めました。赤い振袖の夫と、必死の縄目から解放された女房は、上と下とで感慨深く顔を合せます。

×

×

×

「平次、お前は又大事な捕物を逃したさうぢやないか」

「へエ——」

與力の笹野新三郎、少し苦り切つてかう申します。

「お千代の綱を解いて、源太と一緒に逃すなどは、少しやり過ぎではないか」

「面目次第も御座いません」

平次はこの若い與力の前へ、惡戯いたづらつ子このやうに小さくなりました。

「まア、よい。五人の命を助けた手柄に免めんじて、今度だけは朝あさ倉くら石見守いしのみのかみ様の手前を取りつくろつてやらう。以後はならぬぞ」

「へエ、有難う存じます」

「お前の道樂にも困つたものだな、ハツハツハツ」

朗^{ほが}らかに笑ふ新三郎を伏し拜んで、平次は八丁堀の往來へ飛出しました。襟へベツトリ冷汗。

平次は斯うして又一つ失策^{しくじ}つてしまひました。『手柄をしない平次』の名は、お蔭で又一際^{ひときは}高くなることでせう。

振袖源太と女房のお千代とは、それつ切り行方^{ゆくへ}知れず、石原の利助は暫^{しば}らく小さくなつて引籠^{ひきこも}りました。

言ひ落しましたが、五の日くを選んで五人兄嫁をさらつたのは、源太の父が流されたのは五日で、母が死んだのが十五日だからだと言ひます。

青空文庫情報

底本：「錢形平次捕物全集第十六巻 笑ひ茸」同光社磯部書房

1953（昭和28）年9月28日発行

初出：「オール讀物」文藝春秋社

1931（昭和6）年5月号

※題名「錢形平次捕物控」は、底本にはありませんが、一般に認識されている題名として、補いました。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：門田裕志

2014年1月18日作成

2014年12月28日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

錢形平次捕物控

振袖源太

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>